

一家の大黒柱を突然失うという衝撃

過酷な勤務、経営改善のためのリストラ、なり手不足、などと小児医療を取り巻く環境は厳しい。そんな状況にあっても中原氏は、患者やその家族に慕われる心優しい医師だった。今も、のり子さんの許には、元患者から感謝の手紙が届いている。中には「こんなに大きくなりました」と元気に成長した写真が添えられているものもある。

中原氏が亡くなったとき、長女17歳、長男15歳、二男12歳だった。現在、それぞれ、21歳、19歳、16歳になった。

「中原の死の翌年、病院の寮を出ることに、私の実家のある市

へ引越しました。長女は大学の寮に入り、長男と二男は転校しました。父親の死という衝撃のあと、生活環境や友人も変わったことになりました。私もすぐにフルタイムで働き始めました。ずっと独居だった年老いた母と波長を合わせるのも難しい上、衝撃の大きかった長男・二男が不登校になり、コントロールできない状況でした（妻のり子さん）

「私は父が亡くなって、受験勉強に打ち込み、1年間は寮生活を、2年生のときは都内の独り暮らしをしていて、自分の生活で精いっぱいでした。3年生のときに家族と都内で生活するように初めて家族のことを顧みるようになり、初めて家族のことを顧みるようになり、活してみたら、それぞれまとまり

がなく、自分勝手に「お母さん、こんなに大変だったの」と思いました。父のことだけが理由なのかはわかりませんが、それが大きな要因になっていたことは確かでしょう（長女・智子さん）

激務の末、過労に悩んで自らの命を絶つ。そんな衝撃に、家族も大きな打撃を受け、動揺する。それでも、立ち上がろうとする強い力は、頭を持ち上げてくるのだ。

長女の智子さんは父の死の翌春、医学部に入学し、今年4年生だ。長男の秀之さんも、医学部を目指して受験勉強中である。そして、

「医師を目指す若い人たちが、希望を持って働ける環境をつくってほしい」（のり子さん）

と、小児医療の改善を呼び掛ける署名活動に、取り組み始めた。

私にとつての父親像は、まずはやっぱり屋さんであること、サッカー好きだということ、プレーヤーとして、そして指導者としての父の影響で、私以外みんなサッカーをしていたのです。さらに、優しいけれど、ちゃんとしかっくれる父親でもありました。

漠然と医師になりたいと考えたのは、進路を考える高校2年のころでした。父が医師、母が薬剤師という環境で育ったので、医療は身近なものでした。将来を考えて振り返ったのは小学生のころのことでした。腎臓の値が一時的に悪くなり、通常なら入院するところ父が小児科医だったために通院で

済みました。通院してみると、父は患者さんのみならずコメディカルの皆さんからも信頼されて、生き生きと働いていました。医師にとつてより父に対する憧れがますますあり、医師である父への憧れへと広がり、父のような小児科医になりたいと考えようになりました。医学部へ行きたいと話をしたとき、父は驚いて反対していました。亡くなるまで反対されていた医師を父の死後に目指すというのは、遺志に反していると思うけれども、やりたいことをしたい、後悔したくないから自分の意志を貫こう、と医学部を目指したのです。

父が亡くなったとき、実感がありませんでした。病気でだんだんというのとはまったく違います。情緒不安定ながらも普通に生活していきなりどこかへ行ってしまった、という感じがしました。健康番組をテレビで見たり、医学部の勉強をしたりしている今だから、うつぶすの症状だったのかな、と思うけれども、そのときは、忙しすぎるのかな、とは感じていても、それで病気になるって思いませんでした。直後は、友達がよく家に会いに来てくれたので、少ししてからの方がこたえていたようです。2学期が始まったら学校でいきなり泣き出してしまったり、後から寂しさがこみ上げてきました。専門家が診察して

残された家族たち

小児医療改善への取り組み

1999年8月16日、小児科医だった中原利郎氏は、勤務していた病院の屋上から投身自殺をした。44歳だった。この病院では、96年4月から小児科単科での当直制が始まり、すでに40歳を超えている中原氏には月5〜6回の当直勤務は激務になっていた。中には8回も当直勤務に就いていた月もあったという。そして、「少子化と経営効率のはざままで」と題した「遺書」が残された。妻・のり子さん、長女・智子さん、長男・秀之さんに話を聞いた。

キーワード……小児医療、労働環境

早期発見できていたら防げたかもしれないのに、それができなかったのですから。

夏休みには全然受験勉強に取り組むことができず、秋以降にがんばりました。ほとんど寝なかったと後から聞きました。とにかく、「医師の労働環境を整える仕事をしたい」「父のようなことが二度と起きないようにしたい」という、大学に行く明確な目標があったのです。

実際に父が亡くなったとき、正直なところ、「小児科はやだな」と思いました。しかし、最近になって授業で、小児科の教授の「子どもには未来があり、小児科医はその未来をつくらせてあげられるんだよ」という言葉に感動し、改めて「小児科医ってすごい」と思うようになり、また診療科目を決めたわけではありませんが、小児科も大きな選択肢の一つです。

父が亡くなってしまったことは取り返しがつかないと思うけれども、父は父、とある意味切り離さないといけない部分もあると考えています。悲しみばかりにくれて、ずっとそればかりに執着しっぱなしでは自分がダメになると思つたし、自分を取り戻せば、自分のことも父のことも見えてくると思つた。ただ、父の死という衝撃に対して弟たちは幼すぎたから、今でも影響も大きいのではないかと

と心配しています。確かに私自身もかわいそうとは思いますが、弟たちはもっと大変なものではないかと思うのです。というのも、父が生きていたら、今とはもっと違った生活をしていただけないかと考えるからです。

さて、実際の医学部生活ですが、今年の夏から、山の上で診療活動ボランティアを行う部活動を始めたので、2週間登ってきました。授業では絶対に体験できないことですが、ここでは全身診察や問診をして、とても勉強になりました。8月下旬からは、大学からの派遣として、アメリカで2週間の研修を行っています。メディカルスクールの1年生と一緒に授業と研修を受けるのです。アメリカの医学部生活を見るとき、非常に楽しみにしています。聞いたところによると、授業のスライドはインターネット経由で、自宅ですべて見られるそうです。日本では暗い中スライドを見せられて、自分でノートを取っています。中には、お願ひすると、パワーポイントなどのファイルがCD-ROMに焼いてくださる先生もいらっしゃる。学生から、「患者中心の医療」ならぬ、「学生主体の授業」も少しずつ訴えかけているのです。私たちの学年はみんなまじめで出席率もよく、授業中には質問も遠慮なくしています。趣味としては、

テニスも楽しんでいて、大学生活は楽しい毎日です。

父のことで、つらいこと、耐えられないと思ったことは自分で溜め込んでいてはダメなのだ、と「生き方として」影響を受けていると思います。もちろん、真面目に向き合うことは大切だし、患者さんのためになることですから、真似していききたい、と思う生き方ではあります。しかし、自分に負担となるのが起きたときの対処の仕方は考えないといけません。こういう体験をせずに学べたら、つとよかったですけれどね。

最近になって、父の死という体験も少しづつ話せるようになってきました。全員に告知することにもありますが、労災認定や小児医療改善を求める署名活動なども、私にもできることはやってみようと思

うようになりました。この署名活動の大きな目標は今の小児医療をめぐる問題に取り組むということ。その過程の1つとして労災認定があり、労災認定そのものが目的なのではありません。本当の目的は、医師の負担なしには成立しない、今の小児医療を変えることです。私もそのうち医師になるし母親にもなります。この状況を変えない限り、母親になったときにも、もし自分の子どもを診てほしい、でも診てもらえないと思います。子どもの命にかかわることであり、今、私たちが変えなくては間に合わないと思うのです。

個人としてというよりも、社会的な意識として周りの人たちが助けてくれます。小児医療がきちんとしていなければいけないんじゃないかな、と医療関係者以外

にも呼び掛けていくことにしたのです。普段からの仲良かっただけでは、久しぶりに会ったような同級生にも賛同してくれる人たちがいて、感謝の気持ちでいっぱい。署名の数は問題ではなく、形にこだわっているわけでもありません。小児医療が激務、過労であることに問題意識を持つことが重要なのです。そのために、父の死を知ってもらうことも大きな意義があると思っています。私の話を聞いてほしいし、ホームページも見てほしい。とにかく、やりたいことは、医療を変えることなのです。実生活にかかわることですから、他の人に任せっきりにしては危ないのだ、という危機感を持ついい機会になると思っています。

構成・仁科 典子

長男・秀之さんに聞く

父の影響で、小学校時代から少年サッカーを始め、そこでは父がコーチをしていました。中学に入ったとき、その中学のサッカー部が廃部を決めていたため、父が掛け合ってサッカー部を存続させてくれ、臨時顧問まで引き受けていました。さらに、校外学習としてのスキー教室なども校医として付き添ってくれました。それでも、中学校3年間は反抗期で、「父さんみたいになりたくない」「医師になんかならない」とよく言っていました。その後、高校に入ったころから少しずつ父と話をするようになりました。父の勤務していた病院と、私が通っていた高校はとても近く、病院から私の学校のグラウンドが見え、私がサッカーをする様子を眺めてくれたこともあり、そんなとき、働く父の姿は、周囲の人に対してとても温かいものでした。

夏休みに家族旅行をし、これから何でも話せるな、と思った直後の死でした。一緒に風呂で血圧を測ったとき、非常に数値が高かったため「大丈夫？」と聞くと、「大丈夫だよ」と話していたのも、鮮明に覚えています。

今は、父は世の中で尊敬できる唯一の人物であり、父のようになりたい、父の後をとことん追いかけてい、という思いから医学部を目指しています。それでも受験には不安もあるし、父が生きていたら、進路のことでもっと相談できたでしょうね。ですから、父の死の直後、大学に合格した姉のことはすごいと思っています。そして、自分より幼くしてこういうかたちで父を亡くした弟については、もっと精神的に負担が大きいのではないかと感じています。（談）

「小児科医師中原利郎先生の過労死認定裁判を支援する会」ホームページ：<http://www5f.biglobe.ne.jp/~nakahara/index.htm>